

血液透析患者の約8割が透析によるかゆみを経験 ～血液透析患者の透析によるかゆみに関する実態調査～

株式会社 QLife（キューライフ／本社：東京都港区、代表取締役：有瀬和徳）は、キッセイ薬品工業株式会社のスポンサーとなり、NPO 法人腎臓サポート協会の協力のもと、インターネットを介して募集した血液透析患者を対象に皮膚癢痒症の実態調査を実施し、その結果の一部が日本透析医学会雑誌 2024 年 3 号 (https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsdt/57/3/57_111/_pdf/-char/ja) に掲載された。

本調査により、485名の有効回答が得られ、以下について明らかになった。

- 血液透析患者の約8割が透析によるかゆみについて認知し、かゆみを経験していた。
- かゆみがある患者の2割超が中等度以上のかゆみに悩まされていた。
- かゆみがある患者の半数は生活の質（QOL）への悪影響を感じており、皮膚への悪影響を感じている患者は7割に達していた。
- かゆみがある患者の約4割はかゆみについての相談や聞き取りの経験がなく、症状に対するあきらめや自制により相談していない状況が確認された。
- かゆみがある患者の6割弱がかゆみに対して何らかの治療を行い、その9割弱が効果を感じていた。
- かゆみ治療を行っている患者の半数は治療を負担と感じておらず、多少なりとも満足感を得ていた。また、症状や治療法への関心も高かった。

結果概要

（有効回答全例：485名）

患者背景

- 年齢層：50歳代が26.6%と最も多く、次いで60歳代が21.2%、40歳代が19.8%と50歳代を中心に10歳代（18歳以上）から80歳代まで幅広い年齢層が回答した。
- 性別：男性71.1%、女性27.2%、回答しない1.6%であった。
- 透析歴：6ヵ月未満16.1%、6ヵ月以上1年未満12.0%、1年以上3年未満22.3%、3年以上5年未満16.7%、5年以上10年未満18.1%、10年以上14.8%であった。

透析によるかゆみの認知状況とかゆみ経験

透析患者ではかゆみが起きやすいことを知っていた患者は75.7%、血液透析導入以降にかゆみを経験したことがある患者は77.9%であった。

(以降、かゆみ経験あり：378名)

最近2週間の日中と夜間のかゆみの程度

かゆみを経験している患者に対して、かゆみの程度を5段階^{*}で調査した結果、日中のかゆみは、0点5.3%、1点17.7%、2点50.3%、3点20.9%、4点5.8%、夜間のかゆみは、0点11.9%、1点23.0%、2点44.4%、3点16.1%、4点4.5%であった。日中と夜間では、日中のかゆみに悩まされたと回答した患者(19.8%)よりも夜間のかゆみに悩まされたと回答した患者(28.6%)の方が多く、どちらともいえない、悩むほどではないと回答した患者は、それぞれ27.0%、24.6%であった。

※かゆみの程度

症状なし(0点)、軽微(1点)、軽度(2点)、中等度(3点)、激烈(4点)

かゆみの影響

かゆみを経験している患者に対して、最近2週間のかゆみによる生活の質(QOL)への影響を質問したところ、以下の通り、患者は何らかの悪影響を感じており、皮膚への悪影響を感じている患者は約7割に達し、かゆみによるQOLの低下が懸念される結果であった。

- 社会生活・日常生活への悪影響
悪影響を感じている患者は44.4%であり、内容別では「仕事・家事・学業に集中できない」19.0%、「趣味・娯楽を楽しめない、没頭できない」11.1%と続いた。
- 気分・感情への悪影響
悪影響を感じている患者は53.2%であり、内容別では「イライラしやすくなった」25.7%、「気分がおちつかない、おちこむ」20.6%と続いた。
- 睡眠への悪影響
悪影響を感じている患者は54.8%であり、内容別では「途中で目がさめてしまう」26.5%、「寝つきが悪くなった」24.1%と続いた。
- 皮膚への悪影響
悪影響を感じている患者は70.6%であり、内容別では「皮膚のかさかさ感、ちくちく感などが気になる」39.9%、「皮膚のかき傷が気になる」35.2%と続いた。

かゆみに関する相談経験と聞き取り経験

透析のかゆみについて誰かに相談した経験および通院している透析施設でかゆみについて聞き取りされた経験を確認したところ、60.6%の患者が相談したことがあると回答し、52.9%の患者が聞き取りされたことがあると回答した。いずれも十分とはいえず、聞き取り経験は、相談経験よりも低い結果であった。

相談していない理由は、「相談するほどのかゆみではないから」38.3%が最も多く、次いで「自分でかいたりしてがまんでくるから」24.2%、「かゆみはあるものだと思っているから」22.1%と続いた。かゆみが自制内であるために現状を受け入れてしまっている状況がうかがえた。

かゆみ治療と効果

かゆみに対する治療状況を調査した結果、生活環境や生活習慣への配慮を含めた何らかの治療やセルフケアをしている患者は55.3%であり、そのうちの87.1%は効果を感じており、悪くなった患者はいなかった。医薬品

による治療に限らず、普段の生活におけるセルフケアの重要性を示唆する結果であった。

治療をしていない理由は、「治療するほどのかゆみではないから」49.7%が最も多く、次いで「自分でかいたりしてがまんでできるから」23.7%、「透析のかゆみは、治まらないと思っているから」19.5%、「治療できることを知らなかったから」17.2%と続いた。かゆみが自制的であり、治療法を知らずにあきらめている状況がうかがえた。

かゆみ治療に対する負担感、満足感、関心度

かゆみ治療を行っている患者の54.1%は治療を負担と感じておらず、50.2%が満足していた。一方で、負担感を感じている患者(29.2%)や治療に満足していない患者(16.7%)が一定数存在していたことから、外用薬の塗布を負担に感じていたり、より効果的な治療法を求めていたりする可能性が示唆された。また、85.2%の患者はかゆみの症状や治療に関心があると回答しており、かゆみへの対処に前向きな姿勢がうかがえた。

監修医のコメント

大町土谷クリニック 院長 高橋 直子 先生

今回の調査では、中等度以上のかゆみがある患者さんの割合は2割で、これまでのさまざまな調査結果の4割程度と比べると少なくなっており、かゆみの治療法が進歩し成果を上げてきたことがうかがわれます。

しかし、いまだに透析によるかゆみを知らない、医療従事者よりかゆみについて聞き取りや相談の経験がない患者さんが多いことが分かりました。血液透析患者さんの強いかゆみは生活の質(QOL)を不良にするだけでなく、睡眠障害を介して死亡率を高めるなど重要な症状のひとつです。われわれ医療従事者はもっと患者さんへの情報提供や聞き取りを行い、適切な治療やセルフケアの方法を提供していかなければなりません。

大町土谷クリニック 薬剤部 吉澤 拓 先生

最近の血液透析患者のかゆみの実態を知ることができる報告で興味深いデータであると考えます。患者のQOLを4つに分類して調査していますが、約4割から7割が影響あると回答しており、見過ごすことができない合併症であるといえます。

中でも興味深いのは、かゆみを受け入れてしまい相談していない患者や透析そう痒症について知らない患者も相当数いることであり、今後の課題だと思います。そのために、医療従事者も認識を改め、原因が多岐にわたる透析そう痒症に対する学習も必要ですし、患者に対しても医療者側からも啓蒙や声かけ、そして皮膚を観察する必要があると考えます。現在、薬剤による治療成績も上がっており、選択肢も増えています。どうか、悩まずにかゆみについては、相談していただけたらと思います。

■実施概要：

調査期間：2022年11月下旬～2022年12月

調査対象：18歳以上の血液透析患者

調査方法：インターネット調査（有効回答数485）